

## かみかくし

姉から手紙が届いたのは丁度躑躅の咲き始めた頃だった。書き出しはこんな感じ。久しぶり。お元気ですか。私は元気です。

書の師範がこぞつて目をつけた美しい楷書で、まるで小学生みたいに。久しぶりお元気ですか。私は元気です。なんて、滑稽でふきだしてしまう。

「全くお前はお人よしなんだから」

夫の強い調子に驚いたジルが膝の上から飛び降りミヤオと抗議した。夫は別にジルに怒ったわけじゃないよと頭をなでた。

「僕は許せないね。10年も姿を消しておいてこんな紙切れ一枚。バカにしてるよ」

夫が鼻息を荒くすればするほど私の心は軽くなるようで、姉の消息に心を砕いた日々よりも、姉と過ごした濃密で美しい時間ばかりが頭に浮かんだ。私は救われているとつくづく思う。

「そりゃそうよ。姉さんは天才だもの」

幼い頃から姉は私になど手の届きようのない存在で皆の憧れだった。大人も子どもも誰もが姉の瞳の中に入りたがり、特別になることを夢見たものだ。

祖母は姉を両親の美しいところを抽出したようだと言っていたけれど、姉の素晴らしさはそんなもんじゃなかった。まさに神童。これぞ天才。姉こそが神に愛された娘だと私は信じて疑わなかった。

私は姉とは似ても似つかぬ凡庸さで両親のいまいちな方ばかりを

選んだようだったから、姉と自分を引き比べるなんて考えたこともなかった。むしろ妹である特別さを誇りに思っていた。

「躑躅を見ると思い出すわね」

「どうせ何を見ても思い出すんだろ」

うつとりして言うとうもとうとう呆れ声になった。膝の上のジルもやれやれと目を細め欠伸をした。

「あれは梅で、こっちが桜、そして、木蓮に花水木」

姉はまだ花の芽も出ないうちに樹木の種類をびたりと当てた。まだスモッグを着ていた頃の話だ。

梅は枝の先までしっかりと天を向いて太く突き上げる逞しい感じ。桜の枝は微かな風にも上下に振れるしなやかな感じ。姉はあたかも元々そこにあつた線を浮かび上がらせたというような迷いのない確かな動きで、枝だけで二つをみごとに書き分けてみせた。大人でもとても描けやしない。天才に違いない。すぐに園内の噂になり、その道の師匠達が見学に訪れた。

両親はとても喜んで姉を中でも一番有名な師匠の元へやったのだけれど、姉は絵を描くことなんて好きでもなんでもないようだった。

姉はいつも唇を尖らせながら絵を描いた。

「うわあ、金平糖みたい」

私はうつとりとため息をついた。それは一面に描かれた、満開の躑躅の花だった。薄桃色の星のような形をした小ぶりの花が葉を覆うようにぎっしり咲き乱れていた。

「ばかなことを言って邪魔しないの。これは躑躅の花でしょう。金

平糖だなんて失礼よ」

間髪入れずに母がぴしゃりと言った。私は姉を傷つけたと思って悲しくなった。父がおなががすいているんだろう、と笑うので情けなくて涙が出た。

「躑躅だろうと薔薇だろうとそんなことはどうでもいい。金平糖みたいだっていうほうがよっぽど素敵」

姉は深くため息をついて絵を引き裂き私の頬にキスをした。それからびたりと絵を描くことをやめてしまった。

姉のことを密かに自慢にしていた師匠は慌てて姉に絵を描くように迫り、しまいには力エルみたいにべしゃんこになって頭を下げたが、姉は頑として絵筆を手にしようにしなかった。

学校に上がると書の師範が、数学の学者が、有名な指揮者が次々に姉の才能を褒めちぎり、特別な訓練を受けるように迫った。その度に両親は姉の背中を押し、一度は姉も取り組み始めるがどれも姉の興味を満たすことはなかった。

私はといえば平凡すぎるほど平凡で、姉の才能のひとかけらでもあればと両親を嘆かせた。私は誰に望まれるでもなくはじめた小説を黙々と書いては呆れられた。こんなことをしている暇があるなら勉強しなさい。皆口を揃えてそう言ったけれど、姉だけは私を応援してくれた。私の小説は他の誰の目を引くこともなく、地下水のようにひっそりとただ続いているだけのことだった。

年頃を迎えると姉の美貌は春の花々のように輝きだした。姉はあちこちからスカウトを受け戸惑ったようだけど、一度はモデルを引

き受けることにした。

もちろんモデルは一度では終わらなかった。いや終われなかったのだ。雑誌は爆発的な噂を呼び学校も家もすぐに突き止められた。姉はまたしても自分の意思にかかわりなくステージの上に担ぎ上げられてしまったのだ。

花のない樹木を枝葉で描き分けてしまうほどの表現力を持つ姉は、演技力も達人級だった。すぐにテレビや映画で引っ張りだこになった。同じ家に住んでいるというのに何日も姉と顔を合わすことができないほどだ。

「ひさしぶり。元気？」

風呂上りに水を飲んでいたら姉の声がした。振り返ると仕事帰りの格好で姉が立っていた。サングラスと帽子をはずすと月明かりに照らされた姉はきらきら輝いて眩しいくらいだった。

「やっと夢中になれるものを見つけたの。だからお願い。私が何をしてもあなただけは応援してね」

頬が薄桃色に輝いて、姉がいつになく興奮していることがわかった。私はその後どんなことが起こるかも知らず、応援する、絶対に私だけは姉さんの味方だから、と手を取って固く誓ったのだった。

翌日から姉は姿を消した。正確に言うと私を除く家族と世間から見事に消え去ったのだ。突然の出来事にワイドショーでは大騒ぎ。ここぞとばかりに沸いて出たマスコミたちに家族は四苦八苦した。私は姉の代わりに買い物をして、古びたアパートに通いつめた。私と姉はどこも似ていなかったたので世間の誰も私と姉を結びつける者はなかった。

姉は男の元に居たのだ。ろくでもない、醜く、自分勝手に思い出すのもおぞましい男のアパートに。

姉の男への入れ込みようといったら普通じゃなかった。何がいいのか私には皆目見当がつかない。暴力的で、我儘で、怠惰で、不潔で、美しさのかけらもない男なのに、姉は一時も離れたがらず、病的なほど情熱的な眼差しを一心に男に向けた。

男の方と言えば信じられないことに姉に全く興味がなかった。世間の男がうつつとりする蠱惑的な眼差しに目もくれず、艶めく唇からもれる愛の囁きをも一蹴した。姉の天才的な能力を駆使した、誰もが舌鼓を打つ手の込んだ料理をトイレに流し、踊るように美しく生けられた花を邪魔だと言って投げ捨てた。

姉はこれまでにない熱心さで書を、絵画を、料理を、自身の美を懸命に磨き、表現した。世間から隔たったアパートの一室で一人黙々と修行を重ねその度に退けられ、それでも決してめげなかった。

そしてついに初めて自ら師を求めて外へ出た。

その矢先のことだった。私はいつものように買出しを済ませ姉のアパートに向かった。姉は留守だった。男がシャツの脇から手を入れてぼりぼり胸を掻きながら現れて、突然私に抱きついた。

私は早く姉が帰ってきて助けてくれることを願った。その時こそ姉は目を覚まし私を慰め、男の元を去るだろうと思った。

現実とは違っていた。服を破かれ痣だらけになって泣いていた私に姉が別れを告げたのだった。

「どんなことが起きたのか、聞きたくもない。もう二度と私の前に

現れないで」

その時の姉の顔といったら鬼神のようで、思い出だけで寒気がする。

私はそれでも男への恐怖を押し込めて姉の元へ通った。あの日から一度も扉が開くことはなかったけれど毎日通いつめた。

夫が私の前に現れたのは扉が開かなくなって10日もした頃だったろうか。

あなたは私に大家の息子と名乗り二人の行方を尋ねた。男は何ヶ月も家賃を入れずにいたが、ついに家具も何もかも置いてどこかへ消えてしまったのだと言った。姉が消えてしまったと知って、私はシヨックのあまり人前も構わず大声上げて泣き出してしまった。

あなたは本当は私からお金を取らなくてはならなかったのに心から同情してくれて、一緒に姉を探してくれたね。

「何度思い出してもひどい話だよ」

夫は手紙を天へ投げた。

「何が私はあなたを許しています、だ。そんなもんこっちから願ひ下げだ」

夫は怒りが抑えきれないといった様子で立ち上がりソファを蹴っ飛ばした。ジルが怯えて私の膝に逃げてきた。私は空を舞う手紙を掴んでゆっくりと文字を追った。

久しぶり。お元気ですか。私は元気です。いつもあなたの活躍を陰ながら応援しています。別れてもう10年も経つんですね。あの頃の私は盲目でした。早くあなたに追いつきたくて、懸命だった

たのです。

あなたこそ人生の達人。私はあなたのように唯一つ夢中になってそれだけで人生が豊かに感じられるようなものを見つけたくて、必死だったのです。

何をしてむなしさばかりがつのりました。それを誰にも打ち明けられませんでした。

そんな私に何もかもやめてしまえと言ってくれたのがあの人でした。そんなふうにつけてもらったことがなかったから私はあの人に何もかも投げ出してしまったかったのでしょうか。

あの人だけが私の光でした。そしてまぶしさに目がくらみ私はあなたにひどいことをしてしまいました。

ごめんなさい。私はあなたを許しています。とうに許しています。許して欲しいとは言えませんが。会う勇気ありません。あなたの小説を読むたび胸が痛みます。

私のことは忘れてください。あなたの更なる成功と幸せを祈って

私はため息をついて顔を覆った。どこまでも鈍い私なのでしょう。涙が次々にあふれた。

私は今も小説を書いていた。いくつか本を出すこともできた。今私が書いているのは失われた、家族の物語だ。私は小説を書いているようにいて、姉に届かない手紙を書き続けていたのだ、とようやく気付いた。

姉は今どこでどうしているのだろう。

「泣くなよ」

夫が頭をなでるとジルも膝に飛び乗り私の頬をなめた。それがとても温かくて私はいつまでも顔を上げられなかった。

## 22 侍Alce

マリアさんごめんなさい

隻腕の女剣士、<sup>スバル</sup>昂が目を覚ますと、そこは薄暗い都会だった。

目の前には数人の亡者と戦う若者がいて、自分には一本の腕と刀がある。事情はよくわからないが、昂は考える前に裂帛とともに亡者たちを斬り伏せて、そこにいた若者に声をかけた。

<sup>それがし</sup>「某は敵ではない。これはいったいどういうことか。」

昂がたずねると、彼らは人差し指を口の前に立ててシーシーという音を立てている。

「無礼だぞ！某は敵ではない、ただ事情が聞きたいだけだ。」

昂は背後にうごめく気配を感じながら、一段と大きな声を出した。「もうよい！貴様らにはほとほとあきれ果てたわ。某一人で他をあたる。」

そういつて昂が振り向くと、背後には無数の亡者が居並んでいた。「むう、まだいたのか。かくなるうへは某がこの命に変えてでも貴



様らを切り捨てる。」

昴は片腕に持った剣を構えなおして、巨大な壁にも見える亡者の群れを鋭くにらみつけた。

しかし正眼に構えた昴の剣は、後ろから伸びてきた手によって振り下ろされることは無かった。背後から拘束された昴は驚いて声を上げて抵抗しようとするが、口を手で塞がれていて声を出せないままだこかへ連れ去られてしまった。

数人の手によつて拘束された昴は、コンクリートが剥き出しになった部屋に連れてこられた。そして拘束を解く前に決して声を出さないように念を押されてから、床にそつとおろされた。

薄暗い蛍光灯の明かりに照らされて、光が漏れないように締め切られた部屋には昴以外に四人の若い男女がそれぞれに座っていた。

「まずは礼を言おう。だがしかしあの亡者どもと貴様らの行いはいまいち解せぬ、説明してはもらえまいか。」

昴が質問をすると、18才くらいの青年が答えた。

「こちらこそ助けて頂いたのにいきなり口なんか塞いですみません。奴らは音に向かつて来るようなので。」

「なんと、では某は命を救われたうえにかような無礼を働いていたのであるか。」

そついつた昴は、青年の前でひざまずいて続けた。

「某の名は昴。そなたに救われた恩は、命に代えてでも返そうぞ。もしよければそなたの名を聞かせてはいただけぬか？」

「そ、そんな命なんて大げさな…俺達だって助けてもらったんだからおあいこでいいですよ。んで俺の名前は秋月鷹丸です、みんなは

ハギとか仙台つて呼んでるから昴さんも適当でいいですよ。」

「はあ、なんと懐の深いお方であるうか。不肖この昴、心酔いたしました。」

大げさにかしこまる昴にうるたえているハギを助けるように、明るい金髪を二つに結んだ少女が横から疑わしげに話をかけた。

「そんな仙台の話はどうだっていいのよ。それよりあなたはあんなところで何をしていたの？そもそもそんな調子でどうやって今まで生きてきたのよ。」

「それが、某にもよく思い出せないのだ。気が付いたらあそこに倒れていたのだ。そなたの氣遣いに感謝を。」

「いや、感謝をつて言われてもねえ。」

金髪の少女が困っていると今まで静観を決め込んでいた柔和そうな青年が話に入ってきた。

「ふう、もつぷ。いわゆる一つの記憶喪失とでも言いたいわけですか？まあそれが嘘だとしても今のところあなたは味方のようですな。」

「きおくそつしつとはなんのことか？…ううむ、ここにいる四人は鷹丸殿のご同輩方であるのか、もしよければその二人の名も聞かせてはいただけぬか。」

昴に促されて金髪の少女と、その陰に隠れていた少年が自己紹介を始めた。

「まあいいわ、私の名前は御神楽ナナよ。言っておくが別に仙台は同輩なんかじゃなくてただの下僕だからね。」

「あ、あ…僕は芹沢…<sup>ム</sup>。あつ美しい羽つて書いて美羽つていう

んだけどね、あの…本当はミューなんだって。あ、あの…ごめんなさい…」

「こら昂あまり睨むな、ミューが恐がつてるでしように。」

「おつ、おうすまない。そのなんだ、よろしく頼む。」

昂本人に睨んでいるつもりはないが、おびえているミューに向かってなだめるように精一杯の引きつった笑顔を向けた。

そんなほのぼのとするような掛け合いをよそに、シバが話を始めた。

「一応、記憶が確かでないようなので説明しますが、昂さんが亡者と呼んでいる生き物は一ヶ月ほど前から現れ始めました。そしてたった一ヶ月で人類は壊滅的な損害を被っています。そういったことも知りませんか？」

「すまない、某にはまったくの初耳だ。」

「ふう、もつぷ。嘘をついているようには見えませんが、単に嘘が上手いだけなのかどうか知れませんか。」

「おいシバ、いくらなんでもそこまで言ったら失礼じゃないか。」

「気持ちはいがたいが、よいのだ鷹丸殿。某のようなどこの馬の骨とも知れぬ者がおれば、むしろ警戒しないほうがおかしいのだ。いろいろと世話になったが、某はここにいないほうがよいようだ。」

昂の言葉に誰もが何も言えずにいると、沈黙を破るようにミューがどこか怯えたような声を上げた。

「でもでも…僕はおねえちゃんのこと信じるよ。」

「ミューが信じるなら当然、私もあなたのことを信じるわよ。」

二人は確信に満ちた目で昂を見つめている。

「そなたらは…」

「どうやら決まりのようですな。僕としても、あなたほどの戦力をみすみす迷すのは惜しいとも思っていましたから。」

「すまない、そなたらに感謝を。」

「シバ…お前、相変わらず腹黒いよな。」

「ふう、もつぷ。とりあえず昂さんを見つけたところに戻ってみませんか？もしかしたら何か手掛かりになるようなものがあるかもしれませんよ。」

シバはハギの言葉を華麗に無視して歩き出してしまった。それにつられるように一同もシバの後を付いて行った。

昂が目覚めた場所に戻ると、無数の亡者達が昂を待ち構えていた。

「まさか…なんでこいつらが待ち伏せることができるんだ!？」

「いちいちうるたえてるんじゃないわよ、このヘタレ仙台。こうなったら逃げるか倒すしかないでしょうに。」

「うむ、そのとおりだな。ここは某に任せるがいい、某が負けそうになったらそなたらは一目散に逃げるのだ。」

「でもそうしたらお姉ちゃんはどうするの?」

「某とて一端の武士だ、自分の身などどうにでもなる。」

片腕に刀を構えた昂は、四人を背後に隠すように亡者たちに向かって立った。

「ふう、もつぷ。こついうところでは僕らにも格好をつけさせてはくれませんか。」

「そのとおりだよ昂さん。足手まといにならないように二人は俺達

が守るから、昴さんは安心して戦ってくれよ。」

いつの間にか拾った鉄パイプを構えている二人を見つめた昴は、心強い微笑を浮かべて亡者の群れにゆつくりと歩いていった。

闇雲にまっすぐ向かってくるだけの亡者と、剣を極めた昴とでは、いくら亡者の数が多くても勝負にはならなかった。そして全ての亡者を倒したとき、あたりに大きな羽音が響いた。

「あらあら私の可愛いジャンクちゃん達が壊れちゃったわ。こんな悪い子しちゃったのはだあれ？」

どこか楽しげに話しかけてきたのは、黒く大きな翼で中空に浮かぶ少女だった。

「あ……ああ、俺達じゃねえよ。犯人はあっち行つたよ、あっちあっち。」

「バカ仙台、んな嘘きくわけないでしょ。」

突然現れた謎の少女に、ハギが驚きのあまり見え透いた嘘をついた。

「あらあら、面白い人ね。貴方みたいな人って好きだわ。どうかしら、私たちと一緒にジャンクになつてみない？」

「残念ですが、僕たちは丁重に遠慮しておきます。もともと鷹丸君になりたいというなら話は別ですが。」

「いやいやいやいや、俺だつて嫌だつてば。」

いまいち緊張感に欠けるシバの言葉をあわてて否定するハギを見てクスクスと笑っている少女は、無邪気な口調で話を続けた。

「そっかあ、じゃあ死んで。」

少女が言い放った瞬間、昴の一閃によって少女の体は二つに分かれて地面に落ちた。

「スススス、昴さん！いきなり斬つたりしちゃうじゃないですか。」

「お兄さんって優しいのね、ますます好きになっちゃうわ。でも私はまだまだ沢山いるから安心なさってね。それじゃあごきげんよう。」

少女が言い終えると、その体は塵となって風に飛ばされてしまった。突然のことにその場にいた全員が茫然として、シバが口を開くまでしばらく立ち尽くしていた。

「まあこれで解決まで一歩前進といったところ……ですかね。」

戸惑うようなシバの言葉の後、しばらくしてから視界が真っ黒く染まった。

Quest Mode『異界の剣士1』

完了

視界に光が戻ると、江戸時代風の街並みが広がっていて、周りを見ると頭上に名前の書かれた人が大勢いて、昴の頭上も同じように名前が書かれていた。そこは最近できた『達人Online』というMMORPGのゲームの、ギルドと呼ばれるクエストを請ける場所の近くで、昴は今まで『異界の剣士1』というクエストをこなしてきたところだった。

「いやーやつてきたよ、それがしそれがし。」

隻腕の女剣士昴は、近くに座っている仲間の近くに座ると、さっ

そく話を始めた。

「今までクエストモードなんてやったことなかったから、敵ちよーザコなのなんだよね。」

昴と一緒に座っているのはそれぞれ『薬師』、『防人』と呼ばれる職業の仲間で、頭上には『ながとつち』、『Pタン』と書いてある。

「ね、面白いでしょ。どこまで進めた？」

「まだ1までだけど、明日には追いつくよ。」

二人のうち先に話し出したのは、頭上に『ながとつち』と書いてある薬師の小さな少女だった。

「ストーリー性重視だからサクサク進むと思うよ、とりあえずGW中がんばって。」

もう一人のほうは、『Pタン』という『防人』の大男のプレイヤーで、口数が少ないわりに具体的な話し方を好む人だ。

「あいあい、じゃ今日はもう寝るねー。02。」

「おつかれ^^」

「おやすみ」

二人と別れの挨拶を交わしてから、ログアウトの操作をして接続を切った。

達人 on-line

Log Out

## 23 笑う達人

終日禁煙

「眠れないんです。」

ぼつりと呟くように言う彼の隣で、同じ歳格好の男が、横の彼を指差した。

「こいつ、ここんとこぜんっぜん元氣無くて、困ってるんですわ、先生。俺らコンビ組んでんですよ。なのにネタ忘れるわ、ボーツとしてるわ……ボケじゃ無いですよ、ボーツです。最悪ですよ。おかげでスベリまくりで、ライブでも営業でも、客に『ひっこめー』言われんですわ。堪りませんよ。なんとかして下さい。」

男は一息にまくし立てたかと思うと、相手の彼の頭を手でぐっと押した。無理矢理、深々とお辞儀をさせられても、彼はなすがままにしている。

その態度に、また隣の男は苛々として言った。

「お前も、もう少しなんか言え！」

「まあまあ。」

医者は穏やかに男を宥め、患者に向き直った。

「お仕事は何ですか？」

のんびりと聞く医者に、付き添いの男が目を丸くする。

「コンビ言ったら、お笑いコンビですよ！『ゴカトー』言うコンビ名ですわ。俺が後藤、こつちが加藤。」

後藤は交互に自分と相方を指差した。

「お笑い……ああ、漫才かなんですか？それは大変なお仕事です



ねえ。ストレスも溜まるでしょう。……いつから眠れないんですか？」

「大会が始まってからです。」

「ぼそぼそと口の中で呟く加藤の言葉を相方が捕捉する。」

「今、俺ら『マンザイバトルロワイアル』てのに出場してるんですわ。三回戦まで生き残ってるんですわ。後二回勝ち進めば優勝ですよ。それが、こいつこんなんじゃ、俺らお終いですよ！」

「心因性ですね。」

「医者言葉を聞き取れなかったか、は？と、二人は聞き返した。」

「心因性のストレス障害ですね。しばらく仕事を休めますか？」

「冗談でしょ！準決勝、明後日ですよ。」

隣で騒ぐ後藤に、医者は宥めるように「まあまあ」と、片手をあげる。

「三回戦まではスベらなかったんですか？」

「それまではなんとかやっとなんですわ。参加者多いんで、二、三週、間も開いとつたんです。ここ一週間くらいなんですわ。こいつがこんなになったの。」

ふうん、と相槌を打つと、医者はカルテに目を落とし、思案げに首を傾げた。

「今、丁度ね、『笑いの達人』がうちに入院してるんです。会ってみますか？リハビリ代わりに。」

看護師に案内され、二人は長い廊下を歩いていて、左右の白い壁に、覗き窓の付いた引き戸が並んでいる。

「お笑いの達人で、誰なんですか？有名な師匠なら、入院したらニュースになってますよね？」

看護師は歩きながら首を傾げた。

「さあ……。私達は『笑いの達人』とお呼びしてますけど……」

目的の部屋に着いたので、彼女の話はそこで途切れた。

病室の中から笑い声が響いて来る。

二人は顔を見合せた。

部屋の中には複数の妙齢の男女が、話している。内一人が、ベッドの上で腹を抱えて笑い転げ、その様子が他の者に爆笑を買っているようだった。

「アmanoさん。こちら、『ゴカトー』さん。漫才の方なんですよ。」

看護師の言葉に、笑い転げていた男が勢い良く起き上がった。

「漫才！」

不躰に指差すと、

「なんかやって!!」

と、言う。

周りの者からも拍手が沸き起こった。

「い、いきなりムチャ振りですか？」

後藤が愛想笑いを浮かべる一方で、加藤は青白い顔で立ち尽くしている。その相方を後藤が肘で小突く。

「やれるか？」

唇を青く震わせて、加藤は小刻みに頷いた。とても、漫才など出来そうにない程緊張している。

目が虚ろだ。

案の定、得意のネタを演じて、加藤のボケは間を外し、後藤のツッコミは精彩を欠き、遂にはオチを忘れる始末で、救いようもない。

しかし、室内には爆発的な笑い声が響いていた。

「オチ……！オチ忘れたオチ！ウケる……っ」

アマノと呼ばれた男が、身を折り曲げて腹を抱え、笑い悶えると、他の患者達もつられて笑い出す。

後藤が気分を害したように、アマノに突っ掛かった。

「何、笑ってんですか？馬鹿にしないでください！」

これには、一堂目を丸くした。

「……君、笑わせる為に漫才演ったんじゃないの……？」

そう言つと、アマノは吹き出した。辛抱堪らん、と笑い転げる。

返す言葉もない二人に、彼は更にせがんだ。

「もつとやってよ。面白いやつをさ。」

二人は仕方なく、持ちネタを次々と演じて見せる。

その度に、アマノは笑い転げた。彼が笑うと、大したネタに思えないものでも、周囲の爆笑を買った。

すると不思議な事に、段々と加藤の調子が良くなったのだ。

何を演つても笑つアマノに安心したのか、次から次へとボケ倒し、それにツッコむ後藤も切れ味を増して行く。

オチまでバツチり決まって、室内に笑いと喝采が響き渡る頃には、

『ゴカトー』はすっかり元の調子を取り戻していた。

「はい、検診の時間ですよ。皆さん自分の病室に戻ってください。」  
担当医が顔を出した時には、二人を囲むギャラリーは倍に膨れ上がって、廊下にまではみ出していた。

医者は加藤の顔色を見て言った。

「すっかり調子が良くなったようですね。自信がついたでしょう？」  
加藤は、はにかみながら、はい、と答えた。

「リハビリの効果はあったようですね。」

満足気に頷く医者に、後藤も頭を下げた。

「先生のお陰ですわ。師匠にも見て貰えて、自信つきました。」  
彼は振り返ってアマノにも礼を言った。

「師匠？」

アマノは不思議そうに自らを指差す。

「ええ。アマノさんで、『お笑いの達人』なんですよ？今度は是非、師匠のネタも見せてくださいよ。」

「いや、違いますよ。」

医者が横から訂正する。

「彼は『笑いの達人』。とにかく、何にでも笑つ、笑つ事の特長です。お陰で皆さん自信をつけて帰って行かれますよ。」

「皆さんで……？」

「あなた方で5組目です。マンザイなんかの出場者。」

二人が呆気に取られていると、アマノが大笑いしながら、言った。  
「先生、駄目だなあ。先にオチを言っちゃっちゃあ。」

後日、見事『マンザイバトルロワイアル』で優勝を飾り、忙しい日々を送る二人の元に、医者から呼び出しがあった。

「すみませんね、お呼び立てして。」

「いやあ、とんでもない。俺ら優勝出来たんも、先生とアマノさんのお陰ですから。お礼に来るつもりだったんですわ。」

後藤は何時にも増して饒舌だった。

「ああ、優勝したんですか。それはおめでとうございます。」

感慨無さげな様子で、医者は薄い笑みを浮かべる。

「アマノさんが亡くなったんですよ。ちょうどあなた方の決勝戦をテレビで見ている最中でした。呼吸器不全でね。」

二人は驚いて顔を見合せた。

「お会いした時は元気そうだったのに……そんなに悪い病気だったんですか？」

「いえ……我々も、まさかそんな病気だったとは思わなかったのです。彼が入院したのは、不眠症が理由でしたから。まさか、あんな奇病があるとは思ひもよらず……あなた方にも、申し訳ない事をしました。」

医者は眉間に皺を刻み、苦悶の表情を浮かべた。

「何の病気だったんですか？」

「笑い過ぎ病です。」

医者があまりに真剣な顔で言うので、二人はぼかんと口を開けた。「我々も死後解剖して初めて発見した新種のウィルスでした。脳の一部が感染すると、何をやっても、何を見ても、笑いが止まらなくなってしまう病気です。遂には眠る事さえ叶わないほど笑い過ぎて、呼吸困難で死に至る、恐ろしい感染症だったのです。」

後藤がひつ、と小さく悲鳴をあげる。加藤が息を飲んだ。

「あなた方にも感染の恐れがあるので、精密検査を受けていただきたいのです。なに、感染力は極めて低いようですから、大丈夫です

よ。」

後藤がまた、うひひつ、と声を出すのを耳にして、加藤は絶句した。

続く医者の言葉が、二人の上を素通りして行く。

「……ただ、一度発症してしまうと、手の施しようがないのも事実でして。何しろ、笑う事を止めさせる程、難しい事はありませんからね……………」

## 24 Johnny got his camera

どうい

墨の滲みと掠れ。鮮やかさは失われているが、二つの朱だけが色彩。翼を広げて向かい合う丹頂である。

求愛のダンスなんだろうと察しはつく。つくがしかしと青年は首を傾げた。はあ。この絵を描いた画家は、実際に見たことがなかったに違いない。地がむき出しの和紙の色合いは随分古そうな絵だ。昔は歩いて移動するしか手段がなく、丹頂鶴の飛来地は限られているから取材できなかったんだと一人合点する。

リアリティはからきしながら、絵そのものは素晴らしい。大胆な筆遣いで描かれた二羽の鶴は躍動感溢れている。溢れすぎているが、

そこはそれ。もうちょっと近寄ってみようと膝でいざって、絵どころではなくなった。

寺など滅多に訪れない。だから少々畏まって正座していたらば、この態だ。両足が痺れて笑い出しそうになる。足はもう笑っている。四つん這いで身動きならず、げらげら笑うのを堪えた。

「どうなさいました。」

小一時間近く誰も通りがからなかったのに、こんな時に限って。お構いなく何でもありませんデスと答えたところ、中年の僧侶は察しが早い。おでこに唾をつけると良いですよと教えてくれた。

青年、その名をジョニー沢田。当然だが本名ではない。ジョニーは愛称。少年期に米国に住んでいた名残である。

良い按配に冷めた茶を啜り一息つく。向かい合う僧侶も、湯飲み茶碗を手包んで愛想良く笑っている。坊主つてのは暇なのか。髪はふさふさながら、造作のつるりとした僧侶の顔を盗み見る。

「あの絵を熱心にご覧になっていたようですが。」

「はあ、と生返事。僧侶は続ける。」

「江戸後期の作でしてね。作者の名前は伝わっていませんが、逸話が残ってますよ。」

「逸話ですか。」

「そつ。エピソードです。」

「はあ。」

得意げな僧侶に正直、ヘンなのに捕まったなあと思いつつ相槌をうつ。そんな沢田には頓着せず、僧侶は屏風絵から傍らの荷物に目を移した。

「カメラですか。」

ジュラルミンのケースと折り畳んだ三脚、沢田自身はポケットが沢山ついたカーキ色のベストに、やはりポケットが両の太腿にもついたズボンという出で立ち。おまけに頭は真っ黄色。カメラマンでなければブルー太郎である。

「ええ、仕事で。」

沢田は雑誌社の契約社員で、この寺には取材を終えて足の向くまま何とはなしに立ち寄った。ほほお。僧侶は頷き、あの絵、と再び屏風へ。

「あの絵を描いた絵師は笛の音に導かれたのだそうですが。」

「僕には聞こえませんでした。」

「それは残念。」

茶を一口、僧侶の話はまだ続く。

絵師は旅の途中だった。鶴を描きたいと上方を出立して、五日も経たず風邪をこじらせた。漸く床を払うまで回復したが、旅を再開するにはまだ覚束ない。しかも丹頂の飛来は既に始まっており、絵師が見たかった求愛の儀式に間に合いそうもなかった。では来年まで待つか。いやいや。いま描きたいのだ。来年では駄目だ。とにかく行けば本物の鶴は拝める。それだけでも収穫ではないか。つらつらと考えつつ、世話になってる農家の縁側に出ると、どこからか笛の音が聞こえてくる。伸びやかでいてしんと冷たく、冬空によく似合う。絵師は我知らず笛に誘われ寺の門を潜っていた。

曲の調子は大詰めの激しさ。乾いた音色が高く伸びやかに低く掠れて、独特の震えが張り詰めた場に風の囁きを加味する。真剣勝負。

そんな言葉が絵師の頭に浮かんた。やがて唐突に調べは和み、包み込むような安堵感が広がる。

音を追って踏み入った境内の奥、ちんまりとした僧形の老人が堂の縁に腰掛けていた。目を閉じ唇に笛をあてている。消え入りそうな音が長く長く尾を引いてうねり、突然ぴしやりと断ち切られた。

言葉のない物語だった。

ほんと突き放されたような余韻の中、笛の音と同時に絵師も立ち止まった。老僧が顔を上げニコリと笑ったので、何やら気恥ずかしさにお辞儀を返す。

「旅のお方ですか。」

「はい。その、笛に誘われまして。」

垂れ下がった白い眉の下の小さな目を手元に落とし、お耳汚しでと笛を懐へ入れた。何の。音曲には疎くと前置きし、さぞ名のあるお方ではと問えば、まさかまさかと穏やかに首を振る。

「この通り、ただの雲水にございます。年月だけは重ねましたが悟りとも程遠く。」

よくよく見れば確かに旅装、袈裟もかけずに足下は草鞋履きである。年齢からこの寺の住職かと早合点していた絵師は、はてと首を傾げた。伏せていた間世話になった農家の嫁御に、やれ今日は筵を編んだだけの倅の歯が生え替わり始めたのだ、何のことはない話を散々聞かされた。小さな村である。他にも訪人があつたなら、一度くらいは話題に出ても良さそうなもの。しかし絵師の疑問は「鶴」の一言にたちまち忘れ去られた。

「鶴の巢籠もりと申しましてな。」

先程の音曲、曲名を「鶴の巢籠もり」と言つらしい。

「私は鶴が描きたいのです。」

「ほうほう。かきたい。」

「私は絵を生業としておりまして。」

「ああ、描きたい。成る程。」

この村に滞在している事情を話すと、それはご災難と老僧。

「鶴の巢籠もりとは、そう、夫婦の鶴が冬を越す地で逢つて子を生み育て、その子が巣立つまでの物語でしてな。」

「老師は見たことがおありですか。鶴の夫婦が夫婦と認め合う様を。」

長年雲水として諸国を行脚しているならばと、勢い込んだ絵師の期待は裏切られた。冬は足が独りでに西国へ向かいます。寒さは老体に堪えますでなと照れ臭そうに笑う。悟りとは程遠い。あれは謙遜でも何でもなかったようだ。

真剣勝負と感じたあの調べこそ、絵師が求める場面を描いていたに違いない。せめて実際にしたことがある者から、話が聞けるのではないかと抱いた希望も潰れてしまった。

「お茶のおかわりは如何ですか。」

「いえ。結構です。」

こんな半端なところで話を止めて中座する気が。無言の批難はちつとも功を奏さず、僧侶は湯飲み茶碗を抱えて廊下を行つてしまった。結局のところ、絵師は求愛の儀式を見ることはなかったのだろつか。足の痺れもすっかり治まったので、心おきなく屏風に顔を寄せた。笛の音が聴こえてくる。

坊主の与太話にのせられたかと苦笑を漏らしたが、どうも気のせ



いではない。高音域でも先細りのしない芯の太さが、滑らかに調べを紡いでいた。遠いような近いようなその音の、何と奥行きのある深いことか。

中年の僧侶とは反対方向に廊下に行く。境内の奥、堂の縁に僧形の老人が腰掛けていた。これは何かの悪戯か。笛の音が長く尾を引いて、突き放すように止んだ。

「今日は。」

剃髪しているのか年齢によるものか、老僧の頭はテカテカしている。笛を持った手を膝で揃え、穏やかに挨拶を返す笑顔は妙に俗っぽい。

「鶴の巢箒もりですか。」

「ご存知ですか。」

「丁度話を聞いていたところです。」

「はなし。」

「屏風絵の。」

老僧は二度頷く。あれは良い絵ですと。

「想像とは不思議なもの。ときに事実を越えます。芸術とやらですな。」

「事実を越えねばなりませんか。」

写真は事実を写し撮る。事実を越えることはない。溜息混じりの沢田に、老僧は真顔で答えた。

「想像を越える現実もありましょう。人の知恵は世界を知り尽くすに能わず、己が所業を律するにはまだ浅うございます。」

それで良いのですと再び笑顔に戻る。達観したようであり、やはりその表情は俗っぽい。

「今度はどうなさったんですか。」

振り向けば中年の僧侶が不思議そうに立っていた。いま。そう言いかけて堂を、周囲を見回す。誰もいない。日が暮れようと茜差す西の空、急に風が冷たくなった。

「画家、いや絵師は鶴を見に行かなかったんですか。」

老僧のいた場所をじつと見つめる。行かなかった。絵師は突然あの絵を描き、結局そのまま上方へ戻った。訊いておきながら、沢田は少年の頃読んだ小説の一節を噛みしめていた。彼の愛称と同じ名の主人公の物語。

「彼は銃を手に取った。」

「何ですか。」

いいえと空を仰ぎ、死んだらここに墓を造ろうかなどと言ってみる。死ぬご予定があたりですか。中年僧侶は大真面目だ。

小説の主人公は銃を取り戦場へ行った。沢田はカメラを取る。想像を越える現実を写し撮るために。絵や音楽と違って、写真は想像だけではどうにもならない。足を使って追うしかない。ときに命を賭ける。そして予定は未定。

老雲水が何者であったのかは覚えて訊かなかった。訊いても無駄な気がする。差し当たって、まずは髪を黒く戻して髭を生やそう。

無人の堂へ深々と礼をした。

## 25 達人課

枯れ芒

発生後四時間が経過し、現場は騒然としていた。

……繰り返す。

犯人は男性四名、いずれも銃器所持。

犯人の現在配置は、正面入口及び裏口に監視役が一名ずつ、銀行内カウンター付近に一名、カウンター奥に一名。

うち、カウンター奥の一名がリーダー格と見られる。

人質十四名はカウンター背後に集められている。

女性行員九名は床に端座、男性行員五名は壁に向かって直立。

事件発生一時間後より、内線電話及びリーダー格の所持している携帯電話を使って、交渉を継続。

犯人側は「過激派テロ集団」を自称し、先に逮捕された仲間二名の釈放と逃走経路の確保を要求。

その後、防寒用毛布、軽食、救急セット等の搬入を要求。  
毛布、軽食、救急セットについては対応済。

犯人側一名、人質数名が軽傷を負っている模様。

現在、人質解放交渉を継続すると共に、突入体制の確立を図っている。

本庁の応援を要請します。

……報告します。本庁達人課より応援要員六名（以下）到着しました。

【警察庁達人課】警察各署より「その道のプロ」と目されるスペシャリストを集結させた達人集団。現場の要請により、適宜必要人員を派遣する。

「おお、達人課の方にお越し頂けるとは、心強い。早速、お願いします」

「あ、甘い、狙撃班の配置も定石通りだ。犯人側に悟られる可能性が大きい。現行勢力を分割し、現場周辺建物の低層階にも配置。正面、裏口だけでなく、窓や通気口等も照準に収められるように……」

配置の達人（ ）が行動を開始した。

「……そうよ。あなた達の要求はね、十分に理解しているのよ。だから、毛布とか薬とか、食べ物も渡したでしょう。あなた達のお友達の釈放についてはね、警察庁の独断というわけにはいかないじゃ

ない。だから今ね、各省庁との調整を図って手配中なのよ。もう少しまってね。お・ね・が・い。ところで、逃走先としてはさあ、やっぱり海外が希望なのかしら、はやりだし、ねえ……」

交渉の達人（ ）の通話が続く。

「……女性行員の一人とアイコンタクトに成功。彼女は簡単な手話が出来るので、犯人の特徴を伝えてもらった。リーダー格は三十代、身長約百七十センチ、痩せ型、長髪、眼鏡、口髭、微妙に東北訛りあり……」

潜入の達人（ ）からの無線機越しの報告に従い、プロファイリングの達人（ ）が犯人特定作業を開始した。

その時、

「そりゃ行けえ！ 突入だ！」

突入の達人（ ）のダミ声が轟き渡った。

### 【Mission Failed】

「……つまり『船頭多くして、船、山に登る』もしくは『Too many cooks spoil the broth』との諺の如くでありまして、確かに個々の能力は卓越したものがありませんが、いかにせん、現場は逼迫した状況にあり、各担当に混乱が生じ……」

言い訳の達人（ ）の朗々とした説明が記者クラブに響いた。

## 26 MASTER of THE MASTERS

### インソムニア 英治・ボヘミアン

「俺はねえ、達人の中の達人を目指してるんだ」

「なんですか、その、達人の中の達人というのは？」

氷が入ったグラスに安焼酎を注ぎながら男は尋ねた。二十五、六といったところだろうか。釣り目の、キツネを連想させる顔立ちをしている。常に笑っているような印象を受ける。感じのいい男だ。

「世の中にはな、いろいろな達人つてのがいるんだ。かくいう俺もその達人の一人なんだが」

キツネ目の男が注いだ焼酎を受け取り、もう一方の男が答える。

こちらの男は五十代半ばだろう。真つ黒に日焼けした、愛嬌のある顔。ガツチリとした肩。デンとせりだした腹を揺らしてワハハと笑う。キツネ目の男とは対照的にこちらは信楽焼きのタヌキにソックリだ。

二人がどういう関係かはとんとわからないが、恐らくはたまたま同席になって意気投合した……といったところだろう。

クイツと焼酎を口に含み、タヌキが続ける。

「俺はな、全国、いや全世界を放浪しているんな達人をみてきた。世の中色んな達人がいるもんだ。だがな、それでも俺こそが達人の中の達人つてことを証明しようと思つて達人巡りをしてきたわけよ」

「へえー。そりゃスゴイ。いままでどんな達人を見て来たんですか？」

キツネは細い目をさらに細めてタヌキに問う。

「そうさなあ……あれは俺が中国を放浪しているときの事だった。

黄河を上流に何日もぼって行った更にその先。仙人とかが住んで  
そうな、水墨画みたいな風景が続く場所があるんだ」

「へえ。そりゃ、いかにも、達人がいそうな場所ですね」

「だろ？ でな、幾つもある山の一つの頂上のほうが突然ピカーと  
光り始めたんだ。見るとその頂上に一人の老人が立っていた。あり  
や、太極拳かな。両腕でゆっくりと円を描くような動きをしたんだ。

そのときだ。また別の山の山頂も光り始めた！ そっちの山頂に  
は黄色い袈裟を纏った坊主が立っていて、ゆっくりと、合掌してい  
る掌を離していくところだった。

するとどうだ。老人の方の光の中から龍が現れた！ かと思うと  
坊主の方からは虎が現れた！」

「嘘だー。いくら中国が広いとは言え、そんな映画の中みたいな達  
人がいる訳ないじゃないですか」

キツネがそう言つと、タヌキはニヤリとして答えた。

「ああ。嘘さ。この話はな『嘘とばれる嘘をつく達人』から聞いた  
話なのさ」

グラスに残った焼酎をグイッと飲み干しタヌキはガハハと笑った。  
「なんか詐欺みたいな達人ですね。それならその嘘つき達人は映画  
監督にでもなればいいのに」

「それがな、そいつは『嘘とばれる嘘』しかつけない。だから必ず  
『嘘』がばれるんだ。おかげで交渉事はことごとく失敗。ビジネス  
向きの達人じゃないわけだよ」

「なるほど。嘘が全てばれちゃうから逆に正直者と変わらないわけ

か……そいつは面白いですね」

「だろ。他にも色んな達人にであつてきたぜ、例えば……」

タヌキは古今東西の達人について上機嫌に語りつづけた。一子相  
伝の古武術の継承者、伝説のマタギ、砂漠の緑化を一人で成し遂げ  
た男、スパイ、発明主婦……はては陰毛処理の達人まで、実に様々  
な達人について語った。キツネはニコニコしながら、相づちを入れ  
つつタヌキに酒を注ぐ。

何本目の焼酎瓶が空になったとき、キツネが尋ねた。

「それで、あなたは何の達人なんですか？」

タヌキは煙草に火をつけ、盛大に煙を吐きながら答えた。

「俺はな、『話し上手』の達人だ」

タヌキは新しく運ばれて来た焼酎のキャップを開け、手酌でト口  
りとした焼酎を注ぎながら続ける。

「世の中に達人は多くいれども、その達人の凄さや魅力を雄弁に語  
るものがないと達人は達人たりえないんだよ。下手がいて、上手  
がいて、それを客観的に判断できる奴がいないと達人は達人じゃね  
えんだ。しかもそれを万人に知らしめることができる奴がいて、そ  
いつが世界に『こいつはスゴイ達人ですよ』と吹聴して初めて達人  
つてのは認められるんだ。

そして俺は、吹聴してまわるプロフェッショナル。達人の中の達  
人ってわけだ」

キツネは目をまるくして、少し間を置いてからゆっくりと答えた。  
「なるほど……つまり、あなたが達人の話をしてまわるおかげで、

世の中の達人が達人として認知されるわけですか。

あなたが上手に話せば話すほど達人はスゴイ達人となる。つまり、あなたがいないと達人は達人にならない。だから『話し上手達人』のあなたがこそが『達人の中の達人』に一番近い場所にいる。

と、まあ、こういうことですか？

タヌキは我が意を得たり、と言った感じで腹をポンと叩いてガハハと笑った。

「いや、でも兄ちゃん、今日の俺のトークは渾身の出来だった。いつもより面白おかしく話せたような気がするよ。兄ちゃんは聞き上手だな！」

キツネはニヤリと笑い、こう口にした。

「という事は、僕の方が『達人の中の達人』により近いってことですね」

「なに？」

タヌキから笑いが消え、キツネを睨みつける。涼しい顔をしてキツネは続ける。

「あなたは今日、いつもより上手に話せた。それは僕が『聞き上手』だから。僕がいたから、あなたはいつも面白く話せたというわけです。『話し上手』のポテンシャルを引き出す『聞き上手』。どっちが『達人の中の達人』に近いかは、一目瞭然ですよな？」

タヌキは何か反論しようとして口を開いたが、そこから言葉がでることは無かった。何を喋ってもそれは『聞き上手』のキツネの手柄になっってしまうから。

「今日は面白い話を聞かせてくれてありがとうございます。ここは僕がおりますよ」

伝票をつまみ、キツネが立ち上がりカードで支払いを済ませる。「達人巡り、続けてくださいな。あなたが頑張れば頑張るほど、僕は頂点に近づくわけだから」

タヌキは暗い顔をしていたが、顔を上げて悪戯っぽい笑みを浮かべて言った。

「じゃあ、とりあえず、あんた以上の『聞き上手』の達人を探す事にするよ。そうすりゃ、少なくともあんたは『達人の中の達人』からは遠ざかる。あんたにだけは、その称号は与えたかねえからなあ」

「……健闘を祈ります」

キツネは店から出て行った。根元まで灰になった煙草を灰皿に押し付け、タヌキが立ち上がるうとしたとき、隣のテーブルから声をかけられた。

「あんたら二人の話、頂いたよ」

声の主は白髪の老人だった。タヌキはきょとんとして老人を見つめた。

「あたしや、小説家だよ。達人と呼んでもらっても構わないがね。あんたら二人の話で一本、面白おかしく書かせてもらうよ。そうすりゃ、あたしの方が頂点に近くなるさな」

タヌキはぼりぼり頭を掻き、苦笑いを浮かべ、「こいつは参った」といいながら店を出て行った。

タヌキの背中を見ながら老人は、



「ま、嘘だがね」  
とつぶやいた。

## 27 蕎麦屋のスワイさん

### フランソワーズツルリヌリ

痴漢：81歳老婆、容疑で逮捕 JR山手線内で高校生の尻を触る  
～東京

5月25日16時1分配信 毎日新聞

電車内で男子高校生の体を触ったとして、渋谷署は25日、東京都豊島区の自営業、大木ズワイ容疑者（81）＝豊島区雑司が谷9＝を都迷惑行為防止条例違反（痴漢）の容疑で現行犯逮捕したが、容疑者に認知症の可能性があるため警視庁では関係者を含めての取調べを進めている。

調べでは大木容疑者は25日午前11時5分ごろから約25分間、JR山手線代々木 原宿駅間で、綾西町に住む高校生（16）の尻を触るなどした疑い。【小泉潤一朗】

「母が、大変ご迷惑をかけました」

そう云って『多喜』の主人である義父は頭を下げた。みちるも頭を下げて、先にあげてしまった。下げたままの刈りあげた白髪から

は、地肌が透けて見える。毎日洗っている割烹着だが、アイロンは欠かさない。老舗の清々しさが、かえって陰影を落とした。

『多喜』は今回の事件の容疑者であるズワイの主人であった大木正一が、終戦後満州から帰ってすぐに立ち上げた蕎麦屋である。

終戦直後の物不足の中、山形の農家の三男坊に生まれた正一は、実家から大量のそば粉を仕入れることで商売とした。なにぶんにも食べ物の無い時代のことだ。太くて腰のある山形の蕎麦は、当時の人々の心の支えになったという。蕎麦が売れるからといって特別大きな儲けになるわけではなかったが、『多喜』は日に日に繁盛していった。そうなるに欲しいのが人手である。山形の実家に繁盛している旨を電報で送ったところ、大量の蕎麦の実をリヤカーで引っ張ってきたのが幼馴染のスワイだったというから驚いた。

ズワイとの祝言から七十年あまり、みちるが嫁いでもらも『多喜』はかわらず繁盛している。みちるがOLを辞めて、元いた会社のそばの蕎麦屋の嫁になったのも、この賑わいがあったからだといえるだろう。

ズワイは自分の部屋で眠っている。裸電球の六畳間に仏壇、テレビ、タンスとあって、出入り口には木の柵がしてある。庭へ向かうガラス戸は詰めこんである。長年吊り下がってほころびたカーテンから、陽の光が真直な線を引く。眠り顔は幾重の皺のあいだで透き通っていて、とても大それたことをしでかしたようには見えない。

しかし、ズワイはいつしかこの座敷を抜け出して、ひょいと山手線に飛び乗り、痴漢をはたらいたのである。

男子高校生の。

柔道部員の。

尻を。

多喜の店内は十八席。ズワイの息子で主人の征一、嫁の加代子、そして息子の一喜に妻のみちる。この四人が駆けまわっているうちに昼が過ぎ、夕飯の支度に一人抜けるころには茜差すころあいである。面倒を見きれないのであればデイスサービスだけでもお願いすれば、とは方々からよく言われるが、しかして余所様のお世話になるということは、お世話になるだけ面倒が増えるということだ。秤にかけて、やはり家においておくほうがいい。

ところで、被害者の方からは特に訴えるといったような話は出ておりませんとは初老の担当警部の言であった。

十

昼もすぎて、夕方まえ。この時間に店にくるひとはたいい決まっている。家庭もちではない。朝の遅い会社の人か、それとも今起きた学生が。

人のいない蕎麦屋はすべてが待機している。テレビは客の待ち時間のためにつけっぱなし、鍋はぐらぐら煮えっぱなし。最近はずいぶんワイドショーもワイドショー然してこなくなったな、とみちるは暇そうなテレビの相手をしていたら、店の入口が開いたのである。

大きな影だった。六月に入ったというのに梅雨はまだこない。初夏の日差しが急に潰えて、目がほつとした。いらっしや、と言いかけてみちるははつとした。

「あの、こ、この前は、どうも」

顔に見覚えがあった。この前の高校生だった。義父について一昨日、鶴見にまで謝罪に行ったのだから間違いない。

「いえ、こ、こちらこそ、どうも。この前は、本当に失礼を」

みちるがとつさに怖いなあと思つたのは、高校生が三人いるからだ。いくらかの凹凸はあるにせよ、同じような立派な体格をしていて、一様に坊主頭だ。

「いや、今回はこの前のことじゃなくて。あ、この前のことか。いや、そうじゃなくてですね。あ、あの、おばあさん、いらっしやいますか」

「うちの？」

「ウ、ウス。この前お世話になった、や、なりました」

外は暑いらしい。高校生たちの額には一様に汗の玉が浮いている。

高校生の名前は三井君といった。三井衛。少なくともあと数年は忘れることのない名前だろう。

「ウス、いいんです」

「いいんです、つてもねえ」

三井君の話は、警察から聞いた話とずいぶん違うものだった。

山手線に乗って他校に練習試合に出かける途中（結局事情聴取があつて試合には行けなかったのだが）、吊革につかまっていると、腰まわりを抱きかえられて、腰のあたりをものすごい力で揉み込まれたのだという。

朽木倒した。ふとよみがえる勝負勘。とつさに振りほどこうとするもののものすごい怪力で、そのまま骨盤を押し込まれるとぎゃー、と牛が尾を抜かれるような叫び。なんでしょう痴漢かしら、白昼堂々

大胆不敵な。電車が原宿につきまして、駅のホームにまろびでた。腰にしがみつきなおも揉み上げる痴漢をなんとか引き離す。皺だらけの顔が初夏の陽光に鋭く陰影をつけて、入れ歯を忘れた口腔がぽっかりと闇を生んでババアがババアーン。またしてもぎゃー、と悲鳴がほとばしった。

「それで、ツすね……よかつたんす」

「よかつた、つてもねえ」

翌日のことである。

もともと三井、足腰には自信があつたのである。しかしながら、翌日の朝練では、いつもに輪をかけて倒れない。どうしても、倒れない。ついには先輩軒並みかつたがつんともすんとも言わぬで、一時限目の数学で、前のめりに、倒れた。

「おばあさんに揉んでもらうてから、自分、恥ずかしながら練習試合でも負け無しッす。それでなのですが、えーと、こつちのふたりは同級生の樋口と森下」

「ウスッ」

「ウス」

「ウス、こいつらもおばあさんに揉んでいただきたいと思ひまして、ウス」

みちるは困惑顔で厨房のほうを振り返る。柱から半分だけ顔を見せていた夫の一喜がいよいよやと手を振る。役に立たん旦那だ。

「加代子ちゃん、加代子ちゃん」

はいはい、と加代子が廊下を往く音がする。店に客のびしょ濡れの下人がひとり入ってくる。闇から抜け出るように一喜が奥から出てきて応対する。義父は普段から厨房に籠りきりで、出てこない。

「いまの、おばあさんツすか」

「ええ、お昼寝から起きたみたい」

「……お願いできねッすか」

「お願いといつてもねえ」

加代子を背後に、ズワイが顔を出した。

「あらあ」ズワイは寝起きの目をしばしばさせていたが、入れ歯を忘れた口でうれしそうにつぶやいた。

「大鵬！ 大鵬関でねえか！」

ズワイは大儀そうに店の土間に下りると、三井君、の横の樋口の手を取った。

「あいかわらずでつけえのう。国技館の帰りだあか。横綱ア、蕎麦食いに来てくれたただか。そうかの、じゃあな、ばあちゃんが腕によりさかけるで」

ニコニコしながら早口でまくし立てた。こんなに活き活きとしたズワイを、みちるは嫁いであら見たことがない。

「ちよつとあなた！ 大変です、お義母さんが！」

加代子の声に征一が血相を変えて厨房から飛び出してくる間に、ズワイは半立ちになった樋口の腰にがっぷりと組み付いて離れない。「蕎麦はキレよく、腰がい・の・ちっ！」

ごきん、と頭骨に響く音だ。両目鼻口を見開いて固まる樋口の顔が、次の「コツキン」でクシャおじさんのようになる。ズン、と窓ガラスを震わせたあとには顔色がビリジアンになっている。ズワイ、ここにきて会心の笑みだ。

「加代子ちゃん、なにしとるだね、早う包丁さ持って来ねえど！」  
ハ、ハイハイ！ と加代子は厨房と店を行ったりきたりだ。包丁

を持つてきてどうするのか、やっぱりこの学生さんを切つて蕎麦にするつもりなのかしら。それともなにか……母さん落ち着けよ、と一喜は言つのだが、それよりも止めるべきなんじゃないか、義祖母を。

緑色だった樋口の顔は紫から赤、オレンジ、途中黒を経由して、ようやく健康的なピンクに落ち着いた。ようやく手を離れたズワイの手からは、サラサラと粉末が落ちていく。

「あつ、あれは！」驚愕の征一だ。「昔から母さんの得意体質でね、五十年蕎麦を打っているうちに、指先からそば粉が出てくるようになってたんだ」

いや、それはない。ないわー。

「もう、三十年ぶりくらいよね。よかつたわ、お義母さん！」

「すげえな、ばあちゃん！俺もはじめて見た！」

「ビ……ビブーティー？」

サイババだつて指先から白い粉を出すではないか。ぐつたりと椅子から崩れ落ちた樋口をよそに、今度はすでに逃げ出していた森下にゆらり、とにじり寄る。

「さあ、お前も揉んでもらえ森下！漢になるんだ！」

「嫌だああああ！」

ズワイは酔拳よろしくゆらゆらゆれながら近づいていく。指先からはさらさらと蕎麦粉が流れ落ち、よろけるたびに粉塵がまき起さる。加代子はホウキとちりとりを持ってきてこぼれる粉の掃除をはじめている。いよいよ店の隅、神棚の下に追い詰められた森下。黄金に輝く指先で追い詰めるズワイ。カツ、と開いた口からはこれまた大量の蕎麦粉が噴出して。

後のことは、遥として知れない。

ただし、ズワイは認知症から立ち直り、その後三十七年生きたという。

なお、下人の行方は誰も知らない。

## 28 水無月の道行、物の怪たちの事情

オモロマン

「千年池の長老が言つとつた。今年の天候はおかしいって」

浮かんでいる水草を手で弄びながら言うのは、河童の三郎である。「何がおかしいの？」

その三郎の足を右回りで漂いながらそう聞くのはヤマメのアイコだ。桜色の婚姻色が表れており、恋をしているのが判る。

「もうとくに梅雨の季節だつちゅうに、いつこつに雨が来たらん人間も米が枯れる言つて騒いどるらしい」

アイコは水面に顔を出して、心配そうに三郎の顔を見つめる。

「人間が騒いどるだけなら、わたしは大丈夫じゃろっね？三郎さん？」

「おう。オラたち河童には『河童の瓢箪』があるからな」  
そう言いながら、腰の瓢箪をカラカラと振ってみせる。

河童も百年を生きると神通力を発揮する。三郎はまだ若く、その

力は無いが、彼の祖父の手によって作られたその瓢箪は、決して水の枯れることの無いという不思議なものだった。空になっても半時もたてば、再び一杯になるのだ。しかし、最後の一滴まで使い切ってしまうはその神通力を失ってしまうのだ。

三郎の身長は三尺ほどである。例年なら、三郎がそう高くない木の上から飛び込んでも充分に水しぶきを上げてアイコをきやあきやあ喜ばせることが出来たのだが、今年は池の底に足を着くと頭が水面から出てしまうのである。三郎は水面を漂いながら「ふう」と一息を吐いて空を見上げた。真っ青に晴れ渡った空には一片の雲の欠片すら無く、太陽は水面を温めては、ゆらゆらと陽炎を揺らしている。

（このまま雨が来なかったら、何日持つだろう……）

そんな三郎の心配をよそに、アイコは三郎の脛を突付いている。しかし、そんなアイコにも危惧している事があった。餌にしている水生昆虫の数がぐつと減っており、ここしばらくは空腹の日が続いている。三郎に余計な心配を掛けたくない、とアイコはおくびにも出さない。

数日が過ぎて事態は三郎の予想したとおりとなった。雨に見放された池の水位は、もはや三郎の腰あたりまでしかない。水は濁り、アイコの美しい体色もボンヤリと霞んでいる。

アイコに元気が無いことに三郎が気付いた。

「アイコ、どうした？ 元気ねえようだが」

「そんな事ないわ」

尾びれを愛らしく振りながら、懸命に元気を装う。よくよく見れ

ば、ふつくらとしたアイコの魚体が随分と痩せてしまっている。

「おめえ、餌食つてねえな？ いつからだ？」

「大丈夫よ！ ちょっと太り気味だから減量していたの。だから平気！ 痩せたアイコも魅力的でしょ？」

アイコが無理しているのは三郎にも判った。三郎はと言えば、好物は胡瓜だが、小動物や植物など何でも食べられる。だから飢える心配は無い。

（大丈夫か……？）

三郎の心配したとおり、それから二日後には、アイコはもう濁った水面に口を出して少ない酸素を得るのが精一杯のようだった。三郎はアイコのために昆虫を探しては食べさせた。その甲斐あつてか、二、三日もしたら、再び冗談が言えるまでに回復した。

「三郎さん……ありがとう。あなたのお陰よ……」

そう言つて、目を潤ませる。濁った水がアイコの周りだけ一瞬澄んだような気がする。

しかし、三郎はすでにもう一つの深刻な問題を危惧していた。池の水位はもはや三郎の膝下、すでに一尺を割っている。アイコの薄桃色の体色も泥にまみれて殆ど見えない。

（このままでは危ない……）

ある水無月の晩。青白く光る満月を眺めながら、三郎はずっと考えた。そして、夜が明ける頃、一つの結論に至った。

その計画を実行するには、時間は限られている。そして、三郎自身も非常に危険に晒されることになる。その計画とは、池に生えている蓮の葉に水を掬い、アイコと自分がもつと水の豊富な場所へ移



動する、というものだった。途中でもし、水が無くなったら。もし、人間に見つかったら……。不安は山ほどあるが、ここに居ても、もつてあと二日だろう。じつと迫り来る『死』を待つだけだったら、少しでも生きられる可能性を信じたい。アイコに相談すると、アイコは三郎をじつと見つめて三郎さんと一緒ならと、静かに頷いた。出発は夜。少しでも水の消費と、人間に見つかる可能性を低く考えた結果である。

出発前、もうすでに八寸ほどの深さになった池に跪いて、二匹の生き物は神に祈りを捧げた。残り少ない池の水を『河童の瓢箪』に掬い、身体にぶら下げた。蓮の葉を折りたたみ、水を溜めて、アイコをそつと包む。

「心配すんな……。おらがきつと守っちゃる」

「うん。お願い……」

アイコは不思議と不安を感じなかった。餌が無くなった時点でもう駄目だと思っていたに生き延びることができたことと、何よりも三郎を信じていたからであらう。

半分ほど欠けた月は、明る過ぎず、暗過ぎず、彼等には幸いだった。蓮の葉から水がこぼれないように注意しながらも三郎は足を速める。途中でアイコのために瓢箪から新しい水を足してあげる。

「アイコ、大丈夫か？ 苦しくねえか？」

そう元気付けながら、自分の頭の『皿』にも水を掛ける。

「大丈夫よ。新しいお家へ着いたら、三郎さん、又木の上から飛び込んで見せてね」

「おう、まかせとけ！」

思っていたより、アイコの疲労が激しい。三郎は更に歩を早めた。

最初に着いた池は最悪だった。池の中では、餌が無くなった生き物同士で共食いしており、その死骸により、水は嫌な臭いで充満していた。二匹の生き物は諦めて次の池を探す。

次の池はもはや、すっかり干上がっており、乾きかけた魚の死骸に蠅が集っていた。とてもアイコに見せられる光景ではない。

「ここは、人間の家に近過ぎる」

そう嘘を言つてまた歩き出した。

東の空が明るくなってきた。夜が明けると人間がやって来る。そして、太陽に照らされたら……。三郎はもう、走っていた。

ついに夜が明けてしまった。遠くに煙が上がっているのは人間がそこに住んでいる印だ。

（急げ！ 急がなくては！）

もう太陽は顔を出し始め、すっかり朝の様相を呈している。三郎は池を諦めて、山へ入り、川を探すことにした。それならば、人間に見つからずに、もうしばらく水場を探すことが出来る。

三郎の足は元来、歩き回るようには出来ていない。すでに水かきはボロボロだ。アイコの疲労も限界に近かった。時折、蓮の葉を開いてアイコの様子を窺うが、もう声を発する元気は無く、微かに微笑みただけだ。

それからまだしばらく、二匹の生き物は山道を登っていた。太陽はその本来の勢力を発揮し、二匹を炙り続ける。

（アイコに、蓮の葉に水を補給しなければなんねえ…）

もう軽くなった瓢箪を開け、傾ける。ちよろちよると細い糸が少し垂れて、そして……止まった。

（水が無くなっちゃった……半時待とうか……そうすれば……）

そう思いながら見上げた視線の先には、容赦なく照りつける太陽がある。これでは半時も経たずに干上がったしまつだろう。

アイコを励ましてから、蓮の葉を包む。瓢箪を頭の上で逆さにし、振る。最後の一滴を皿の上に落とし、『河童の瓢箪』を放り捨てた。  
「よしっ――」

声を出して三郎は再び山道を歩き出した。

太陽はてっぺんから照りつける。皿が乾きかけているため、三郎は眩暈を起こし、足がふらついた。木陰に入り、へたり込む。荒い息をついている三郎を、これもまたヒレを動かす力も残っていないアイコが気遣う。

「……三郎……さん」

心配かけまいと、必死で取り繕う三郎。

「お、おう……心配すんな。大丈夫、ちよつと休んだだけだ……」  
ぐらぐら廻る地面をボロボロの水かきで踏みしめ、もたれていた木につかまりながら立ち上がった。二歩、三歩。ひなたへ出た。太陽が容赦なく照りつける。「ジュツ」と音を立てて、三郎の頭にある皿の水の最後の一滴が蒸発した。膝から力が抜け、もんどりうつて倒れてしまった。しかし、両の手は蓮の葉を、アイコをしつかりと包んでいる。その手の中にあるアイコも、もう水は身体を辛うじて濡らす程度しかなく、乾き始めたエラからは殆ど呼吸も出来ていない。それでもアイコは力を振り絞って言う。

「……さ、三郎さん……私、もう駄目……苦しいの。わ、私が死んだら、私の血を……」

その愛しい声を聞きながら、もう三郎は声を発することが出来ない……。

三郎とアイコは殆ど同時に息絶えた。その日の夕刻。全ての生き物が待ち望んでいた雨が降り、田畑を潤し、生き物たちの命を繋ぎとめた。しかし、今まで降らなかった分を取り戻すかのように降った雨は水嵩を増し、志半ばにして命を落とした三郎とアイコの骸を押し流して行った。

## 29 涅槃

加藤火音

→

わたしは今、箱の中に横たわり、最後の動きを終えた。

ひとさし指と中指を立ててピースサインをしたつもりだが、どうだろう……わかつていたことはいえ、やはり緊張ぐらいはするもので、いかにも断末魔じみたかき爪のようになってやしないか……いささか心配ではある。だがしかし、すべての事象など、微々たる、ただの無用の長物であることを、今まさに証明するところなのだから、これは甚だ滑稽な一人相撲である。

もう見えないが、虫のたまごのような楕円の箱は、舐めかけの飴のようなひび割れのある、てらてらした黒だった。わたしをおさめ

ると、内壁の白は収縮……いや膨張し、身体にびつたりとはりつき（一瞬感じた肌触りは綿のようだった）、わたしは身じろぎ一つできなくなったというわけである……が、勘違いしてもらってはこまる、わたしは決して、死んだわけではない。むしろ生まれたといつていい。自由を得る為には、ある程度の不自由が必要だといわれてきたが……中々どうして、まさか不自由こそが自由の隠蔽的擬態であるなどと、誰が気づき得たろうか。

この話を持ちかけてきたのは、わたしの親友であり、また「思想家」としてのわたしの良き理解者でもある、ウーティス博士であった。彼は、木目の黒ずんだ古い飲み屋で、この箱……コフィン（すこぶるふるった名前だ）の完成を打ち明けてくれた。わたしは、社会や世間というものへの接点をできるかぎり減らし、動くこともなく、崇高な思索の日々を送っていたので、その日も、外に出るなど無意味だとしぶって、結局は彼に引きずりだされたものだ。母が、もう帰ってこなくていいといっていた。

彼の共犯者じみた顔も、この時ほどは良く似合ったことはないだろう。肉体を生かすために必要なことを、一手に肩代わりしてくれる箱を発明をしたというのだから、確かにわたしにも、しめた話だったわけだ。しかし彼は、まだ試作段階だからと……自分が中にはいり、わたしに記録係をやらせてやろうという腹づもりだったらしい。なんともいやらしいじゃないか……まさに自由を得るための不自由だったのだと、見せつけてやろうとでもいうような……

途中で席をたちかけたり大きな声をだしたりと、穏便といえなかったが、議論というやつを交わし、どうもこの発明は、そんな安っぽい目的のただに使われるべきではないのではないかという結

論へと（ほとんどがわたしによって）導かれた。コフィンは、収容した人間の五感をことごとく奪い、ひきかえにすべてを代行してくれる。ここには自分の意識しか存在しないのだから、むろん他者からの影響、傷口に塗りあう薄汚い唾液などに惑わされることもなく、ならば超自我の狭間に、己を壊してしまいう気遣いもあるまいし、ただ己の為だけの思索にのみ耽り続けることが可能なのであるから、肉体をいけにえに、限りなく高い精神の飛翔をおこなえるというわけである……すると、やはりこれは、わたしのすべきことではないかと、そう主張すると、共犯者は待ち受けていたように、薄皮の裏ではにかんだのだった。彼は最後まで、酒を一滴も飲まなかった。

## 2

びつたりと埋められた視界には、流動する筋もない。闇すらなくなってしまうた。

それにしても、感覚がないというのも、なかなかおかしな感覚である。隙間なく固定された皮膚はすれることがないのだろう、まるで拡散されてしまったようだ。発汗や皮膚呼吸などに配慮した素材とシステムを使っているそうだし、むろん不快ということは無いが……ちぎれた手足を動かしている感覚とでもいおうか……こんなものはまあ、いずれ慣れてしまっだろう。

巨大な消しゴムに追いかけて逃げ込んだ洞窟はやはり、骨に直接しみてくるような、あの独特の寒さだった。よくひびく足下をしつかりとさせているのは、どこからか引かれた(岩壁に小さな穴を空けて、直接上から通しているのだろう)線が、ところどころの電球によりみちしているからだ。高さは十分だが幅のせまい穴は、らせん状にくだつていて、水音と、何かが転がる音がうるさい。そこから時おり枝分かれした先に、ぶ厚い鍍金じみた鉄の扉がはめ込まれているのがいくつか見受けられ、それぞれ赤いペンキで、番号が塗られていた。

かなり歩いた頃だったと思う。と、思ったようだ。内部はきれいに研磨された壁で、そこには小さな穴がいくつかあいていて、中には家電や蓮の花などが置かれている。そこかしこから、間接照明のような鈍い薄明かりが、ぼんやりと染みでていた。

「困った時はおたがいさですよ。あ、食器類はこころにまとめてありますから、覚えておいてくださいな」

と、青いシートにくるまった女は、穴の一つから茶碗を出して、そのおくにはめ込まれたパッキンから、ゴボウの味がするお茶を注いでくれたので、わたしはストローで飲んだ。どんな顔なのかかわからない(美人とまではいかないようだ)が、なるほどいかにも気安そうな女ではある。

「酸素の配給、ああ、それはもちろん、ご心配には及びません。ここに資料を置いておきますから、あとでご覧になってみて下さい」  
彼女は名を　というらしい。切れ味の良さそうな極彩色の用紙

……どうも親切かどうかは紙一重だが、これ以上の詮索は失礼にあたる。いまさら文句は言うまい。断面のまだ初々しい、けばだったテーパーに書類を広げ、

「最後に、ここにサインを」

《以上の契約に同意します》の項目を、どこにでもあるペンで指して、両方を私に渡したのは、口だけで笑っている、四十がらみの男だった。

「これであなたは、あなたの　から……いくなれば外界より干渉される苦痛から、解き放たれたわけですね」

巨大な蚊柱の、おーんと轟く振動が、耳の奥から這い上がっては途切れ、鼓膜は一定の周波数を受信し始める。まるでハーモニカを吸い込むような、あのいやらしい感覚で……夢だろうか……いや、いずれにしろ変わるまい……わたしこの慣性を消せないのだ。わたしはそのまま、絞首の縄の感触を、落下の衝撃を、肺病みの呼吸を、とめどない沈殿を、錆びた鉄の味を、死からみる生への境界を、時の欠落した心像に到達し続けた。増上慢どころか、達観した人間ですら、なんとくだらないこと……「果て」など、どこにも存在しないのだ……わかっているといわれるかも知れないが、むぎだしの精神であるわたしには、実感がともなっているのだ……死してなお、死ぬことができない、絶体的自由……逃げ場のない自由……動きまわる不自由をくりつけた肉体などが、はたしてわたしの導きだしたものと並べるに価するだろうか？……精神衛生上一番まずいのは、理由のない不安の蛆が、急激にわいた場合である。四肢がだるくなり、まぶたは涙が溢れる寸前の水銀のおもさで……ぜんぶ、胸の空洞の中でおこなわれるポンプの運動のためだ。不安に理由はないの



だから、解決もない。解決するために必要な理由すらないのだから、肉体というものは、非常に有効な発散の媒介なのではあろう……概念のくだらなさも、喉元……喉元を過ぎれば、愛しくなってくるものだ……善悪、好悪、正否の判断ですら、判断という観念の、観点を変えて……ようするに、無くしてみれば……実にかわいい、子犬のようなものだ……「真の自由」を追い求めるなどとは、まったくくだらないことをしたものである。そこからまず、つくりだされた妄執に過ぎないじゃないか……なんと蒙昧な思索だったろう……大体からして思索……いや、概念の概念、観念の観念自体も同じだ……この素晴らしい考察……考察でいいか……考察を、何とか文字でも映像でもつかって、残せないものだろうか……なんならこの栄辱の名誉を、まるごとくれてやったっていい……

4

「無」とは、常に対義の混濁とした、その中心の、めまぐるしい閑散である。……しかしデジャビュとでもいおうか、既得の感覚ではある。わたしは今、コフィンに横たわる、わたしを見ているようだった。わたしが、わたしを見ている……わたしは、わたしだけの世界に埋没しながら、いや、だからこそ、わたし自身に焦点をあてて考えてみたことなど、ただの一度もなかった……まったく、他人の子供のような顔だ。醜くふくれていた身体は痩せほそるではなく立派なもので、筋肉に直接刺激を与える装置があるなどといったから、そのためだろう。皮膚も、ほどよい紫外線の照射で、張り

のある、健康的な小麦色……これがわたしか……わたしがそこに眠って……いや、純粹な「無」の覚醒状態にある。それではわたしは、「わたし」とは何だ？ 思索しているわたしのことを思索しているわたしとは、一体何なのだ？ 考えてみると、わたしが、わたし自体を思索の対象としなかったのは、どれだけ死を突き詰めても、わたしという存在の頂点にだけはのぼりつめたくなかったからではないだろうか……ならばどうして、わたしはそれをしてしまったのか……わからない……どうやらその根源から、意味という意味をすら失ってしまったようである。なるほどいくらわたしを構成する細胞のことであっても、わたしは細胞の立場になど立てはしない……わたしはわたしを、わかってやれないのだ……ならば「創る」か……「無」からのみ「生まれる」新たな……いや、もうやめよう……「言葉」を尽くすだけ「矛盾」が「生じ」てしまう……

「わたし」は「だから」……「考える」ことを……「やめる」と「に」「し」「よ」「う」……「と」……

……思う。

そうそう、気になっていたピースサインだが、かぎ爪どころではなく、中指だけが立っていたようだ。まったく粗末な始まり……いや、終わりである。



## 大沢秀夫

宿泊中のホテルを出ると、5月にしては少し肌寒い夜風が街を覆っていた。

駅前のアーケード街を真っ直ぐ進み、交差点を挟んだ先に繁華街の原色のネオンが瞬く。

一軒の雑居ビルの地下に、目的の店はあった。

目立った看板はなく、初見の客はビルの壁に無造作に貼られたイベント告知のチラシが、その店を探す頼りになる。地下へと続く階段を降りてゆくと、重厚な鉄の扉から僅かながら音が漏れて聞こえる。

「おかえりなさい、シン」

扉の前の机で、手持ちぶさたにボールペンをくるくると回している女がひとり。懐かしい顔だ。

「ユウ、お客さんの入りはどう？」

「チラホラつてとこかしらね。まだ23時だから…これからよ」

「ま、そうだろうな」

「メジャーデビュー後の帰省DJなんだから、がつつり盛り上げてよね」

ユウの言葉に、照れ隠しの笑顔を向けてから重い鉄の扉を開ける。それまで小波だった音が大洪水の如く店内に流れている。入ってすぐの空間はラウンジになっている。照明は薄暗い赤色で、壁には数点の絵画がかけられていた。バーカウンターは左手にあって、向か

い側に椅子とソファが並べられている。大洪水の源たるフロアスペースは、薄い生地のカーテンをくぐった先にある。

女性ボーカルの透き通った歌声に、郷愁感が切なく響くピアノのメロディに体を揺らしながら、カウンターでジントニックを注文する。

「今日はよろしく頼むよ」

グラスを受け取りながら、声の方向へ顔を向ける。カーテンをくぐってフロアから現れたのは、この店、クラブハウス『es』のオーナーだった。背の低さとは対照的なガッチリとした体型。短髪で強面なところも変わっていない。

「ナカムラさん、こちらこそよろしくお願いします」

8年前、20歳だった俺はDJ仲間達と、このクラブでハウスミュージックのイベントをスタートさせた。オーナーとは、その頃からの付き合いになる。イベント自体は3年後に解散し、その後地元での仕事を辞めて、ひとり東京へ上京した俺は自主制作の曲をインディーズで発売した。それから地道に活動を続け、メジャーデビューICDをリリースしたのは今年の一月の事である。今夜は、そのリリースDJツアーの一つでもある。

「音響は昼にセッティングした状態のままだから、もし、気になるところがあったら言ってな」

「わかりました。じゃあ、もう準備しときますね」

オーナーがバーテンからビールを受け取って、二人で乾杯をした後、フロアに足を運ぶ。明滅するミラーボールの輝きの下、グラスを片手に踊りに耽っている客がまばらにいるぐらいで、踊るには十分のスペースが空いている。片隅で180センチはあるう長身を壁

に寄りかけている男性が携帯電話を触っている。

腕時計を見ると、まだ0時にもなっていない。ユウが言っていたように、客が集まるのはこれからだろう。東京のクラブハウスのピークタイムは、深夜2時から3時を越えたあたりからだ。esのような地方都市のクラブでも、ピークタイムが遅い時間という話は聞いていたので、集客的な部分はさほど心配していない。いや、一ゲストDJが、集客の心配をする必要はないし、そもそもイベントの良し悪しを決めるのは集客数じゃない、『質』である。

フロアの後方部、ウーハースピーカーの前に陣取り、空間の全体を眺める。キックの音に合わせて、ブース上方に設置されたライトが点滅を繰り返す。疾走感溢れるウワモノのシンセサイザーの音、トランシーナ電子音がじわじわとフロアの空気を盛り上げていくのを感じながら、自分のDJセットのイメージを膨らませる。

DJは自ら演奏するわけではない。レコードを選んで、曲をかけ、繋げるだけである。しかしながら、実は単純なものでもない。フロアの空気、客の反応を読みながら、選曲をしていく。ミキサーを使ってフロアに流れている曲と、これから流す曲を繋げる操作も、テクニク次第でフロアの盛り上がりコントロールできる。レコードはDJが選ぶものではなく、フロアから選ばれるのだ。

気が付けば、客の数に比例して、盛り上がりも増してきた。ブースに入って、セッティングの時点で持ち込んでいたレコードバックを開けて準備を始める。フロアは再び女性ボーカルのアッパーに鳴るピアノ曲だ。

「このまま落とさずにアゲていっても大丈夫ですか？」  
いまDJをしている青年が、声をかけてきた。青年の名前はタク

ヤ。昼のセッティング後に昼食と一緒に食べて、熱く音楽論について語った時に、とても好印象をもった。

「ああ、このままお願いするよ。あと、2枚ぐらいで代わるのかな？」  
「時間的にそうですね。じゃあ、次の次で」

持ち込んだ音源はレコード70枚とCD100枚。テクノとハウスを軸に臨機応変に展開を作っていくには、これでも足りないくらいだ。中にはパソコンを使ってDJをするアーティストもいるが、どうしても機材トラブルが怖くて、俺は使う気にはなれない。

いい感じにフロアが熱くなってきた。こちらのテンションも上がってくる。最初に使う曲は、メジャーデビューCDから、エレクトロ・ディスコな1曲を使うことにした。ただ、これもイベント用にエディットした特別仕様だ。

タクヤが最後の曲を使ったので選手交代、俺はミキサーの前に構える。タクヤが使ったのは、ロックテイストを強めたディスコサウンドな曲だ。ベースのグルーブがたまらなく気持ちいい。

CDをセットして、ヘッドホンでモニターしながら、曲のテンポを合わせる。ミキサーで音域の出力を調整しながら、準備は完了。あとはタイミングを見て音をリリースするだけ。直感的にエフェクターで音を歪ませて、フロアを煽る。その操作を横目で見ていたタクヤが「すげえ……」と一言。

フロアの盛り上がりが最高潮に達したところ、自分の曲をリリース。徐々に音を入れ替えながら、ここぞという箇所、一気に低音を入れ替える。

両手を天井に突き出した客が、「おおー」と大歓声を上げる。エフェクターを使って、キック音のテンポを上げて連打。低音を最大

まで切って、高音を上げてメリハリをつける。

フロアの熱が冷めないまま、時間はあっという間に過ぎていった。ちょうど深夜3時を回ったころ、ブースの前にやってきた女性と目が合った。何も言わず、ただ俺をじつと見ている。

どこか覚えのある顔。いや、忘れるはずなかった。東京へ上京する直前まで付き合っていた彼女だった。別れてから連絡を取り合うことはなかったが、まさかこういう形で再会するとは思いもしなかった。

「東京に行くことにしたんだ……。遠距離のままだと君に寂しい思いをさせるだけだと思う。だから別れよう」

最後までわがままに付き合ってくれた彼女。

静かに頼みを聞き入れてくれた彼女。

キラキラした綺麗なメロディがフロアを包んでいるなか、レコードバックから一枚のレコードを選び出す。

別れる直前、レコードショップで彼女が選んで購入した一枚。

ターンテーブルにレコードをセットすると、針を落とす。「ただいま」の気持ちを込めて。

『SWEETEST DAY OF MAY』

Mmm... Mmm... 自由

五月のいちばん甘い日

Hey yeah! Hey yeah! 自由

私は忘れない

あなたが現れたあの日

私は言葉を失ってしまった

なにも言うことはなかった

あなたは、前にロスのバーで会ったことがあるねと言った

あれは私の五月のいちばん甘い日

Hey yeah! Hey yeah! 自由... 私のステキな...

あなたが私の目を見つめていたあの夜を忘れない

ステキすぎて私は泣きそうだった

怖がらないで

私もこんな気持ちは初めて

私の五月のいちばん甘い日

Hey yeah! 五月のいちばん甘い日

忘れないあの日、忘れないあの夜

あなたは私の目を見つめていた

それは本当にいい感じだった

五月のいちばん甘い日

あのいちばん甘い日

甘い、甘い、甘い、甘い、甘い

五月のいちばん甘い日

・ 終 ・